

・

1月中旬、スウェーデン北部の北極圏で撮影した一枚です。長く続いた極夜が終わりに近づき、地平線の下からわずかに太陽の気配が戻り始める時期でもあります。空はまだ深い青に包まれ、昼と夜の境界が曖昧な、北極圏特有の静かな時間帯です。

この夜に現れたのは、ブレイク・アップと呼ばれる激しく躍動するオーロラではありません。空一面を覆い尽くすような派手さはないものの、青く澄んだ風景の中に、淡い緑色の光が静かに浮かび上がっています。その控えめな輝きが、かえって周囲の静寂を際立たせ、北極圏の冬らしい美しさを感じさせます。

現地でこのようなオーロラに出会くと、光がまるで手を伸ばせば届きそうなほど近くに見えることがあります。雪原や樹林のすぐ上空で、薄い光のカーテンがゆっくりと揺れているように錯覚する瞬間です。しかしオーロラの実体は、地上から数百キロメートル上空。高層大気と宇宙の境界に近い場所——いわば「宇宙の渚」で生じています。

夜空そのものが淡く発光しているように見えるこの現象は、「宙が光る」としか言い表せない、不思議な体験です。日常生活の中では想像することも、直感的に理解することも難しい、宇宙と地球が直接つながっている証しのような光景が、静かに広がっていました。

(2026 年 1 月中旬／スウェーデン・ヨックモック郡・ポルユス駅／東京から遠隔観測)

